セブ島における語学留学プログラムの構築

倉　増　泰　弘

要　約

梅光学院大学では、平成25年度主に1年生を対象に短期語学留学プログラムを企画・実施した。本稿ではまず、2度学内で実施したTOEIC IPのスコアと留学後アンケートの回答から、当プログラムが参加者の英語力にどの程度影響したのか考察した。その結果、TOEICのリスニングのスコアに明確な進歩が見られ、留学後アンケートからもリスニング力の向上を感じている参加者が少なからずいることが分かった。また留学後アンケート中のプログラムの評価に関わる項目の回答から、プログラム全体の評価が高く、中でも語学学校や講師に対する評価が高いことが見受けられた。最終的に、当プログラムの課題点を明らかにし、今後より良いプログラムが構築されるのに何が必要なのか示唆する。

キーワード：語学留学　短期留学　満足度　自己向上感

はじめに

OECD等における統計をもとにした文部科学省の集計によると、日本人の海外留学生数は2004年の82,945人をピークに年々減少している。一方で、アジア圏への留学生数は1位の中国や2位の韓国を代表に年々増え続ける傾向にある。その中で英語を公用語とするアジア諸国への留学も増加傾向にあると言われている。英語習得を目的とした留学は、これまでアメリカ、カナダ、オーストラリアなど、いわゆる英語圏への留学が主流であったのが、アジア志向が高まり、また距離も近く安価で語学留学ができるために、東南アジア諸国への留学の人気が高まっている。

現在全国的に大学の語学留学や企業の研修のために、マレーシアやフィリピンに渡航するケースが増えているようであるが、梅光学院大学でも近隣の大学に先駆けてフィリピンでの留学プログラムの構築に向け、フィリピンセブ島及びルソン島（マニラ近郊）を視察し、平成25年夏季休業中に第1回プログラムの実施に至った。

1. 目的

本稿の目的は以下の2つある。1つ目は、平成25年夏季休業中に実施されたセブ島における短期語学留学とそれに伴う準備講座やオンライン英会話を含む一連のプログラムが、参加者の英語力の向上にどの程度寄与したのか検証することである。このことをTOEICのスコアの推移と留学後アンケートの結果から考察する。2つ目は、学習面以外の視点から同プログラムの課題を明らかにし、今後より良いプログラムを構築するために何が必要となるのか検討することである。このことを留学後アンケートのプログラムの評価に関わる項目から得たデータをもとに考察する。

2. プログラムの概要

本章では、今年度実施したプログラムの概要を紹介していく。

2.1 名称

今年度、プログラムの名称を「セブ島留学プログラム」とした。検討の段階では、本プログラムが語学留学中心のプログラムであるという理由から、「セブ島短期語学留学プログラム」とするという案があったが、今後長期間での実施や、語学留学だけでなくインターンシップやボランティア活動なども盛り込むことを視野に入れるために、最終的にこの名称に決定した。ただ来年度以降同名称で継続するかは未定である。

2.2 プログラムの目的・趣旨

このプログラムの目的は2つある。まず1つ目は、入学から早い段階で集中的に学習することで英語力を一気に向上させ、後々の学習の効率化を図ることである。特に、スピーキング力とリスニング力を身に付けることが重要となる。

2つ目は、アジアでどれだけ英語が使われているのかという現状に触れ、将来ビジネスや勉強で「使える」英語を身につけることである。日本企業のアジア進出が著しい今日の現状を踏まえて、世界に多種多様な英語があるという事実を認識させ、今後の英語学習の動機づけや方向付けを意識している。

また、フィリピンを留学先として選択した理由は以下の通りである。

- 安価でマンツーマンレッスンの受講が可能
- 日本から近い
- 親日的なフィリピン人の国民性

・各語学学校には日本人スタッフを常駐させている学校も少なくなく、日本人向けプログラムをバックアップする体制がある

2.3 参加者

本プログラムでは、申し込みがあった学生の中から英語英文学科（以下「英語英文」と呼ぶ）の1年生を優先的に選出し、残りの定員は抽選で最終的に50名となった。参加者の内訳は表1の通りである。

なお、引率した教職員は3名で、うち1名が英語英文の教員（筆者）と2名の職員であったが、教員が2週間で帰国しなければならなかったため、別の職員が1名交代で合流した。

表1　平成25年度プログラム参加者内訳

	1年	2年	3年	4年	計
英語英文	28	0	4	1	33
他学科	15	0	2	0	17
計	43	0	6	1	50

2.4 プログラムの構成

本年度のプログラムでは、現地留学の前後に留学準備講座（科目A）と留学事後講座（科目

表2　セブ島留学プログラムの日程

日　付	摘　　要
4月26日（金）	留学準備講座（科目A）受講開始
5月17日（金）	前期オンライン英会話受講開始
5月18日（土）	TOEIC IP受験 ⬍
8月10日（土）	前期オンライン英会話受講終了
8月11日（日）	日本出発（深夜現地到着）
8月12日（月）	オリエンテーション、プレースメントテスト
8月13日（火）	語学学校授業初日
	⇕
9月6日（金）	語学学校授業最終日
〃	現地出発
9月7日（土）	日本到着
9月8日（日）	後期オンライン英会話受講開始
9月27日（金）	留学事後講座（科目B）受講開始 ⬍
10月5日（土）	TOEIC IP受験
12月13日（金）	後期オンライン英会話受講終了

B）を受講し、これらの授業の一環としてオンライン英会話を受講することが義務付けられている。またプログラムの効果を測定するために、5月18日のテストをPre-test、10月5日のテストをPost-testとして、参加者はTOEIC IPを2回受験することが課されている。それぞれ留学前と留学後にTOEIC IPの受験を参加者に課している。表2はプログラムの大まかな日程である。

2.5 留学準備講座（科目A）

本プログラムでは科目Aを留学の準備講座として開講し、留学に関する説明及び関係書類作成をするとともに、留学に必要な英語力（主にスピーキングとリスニング）のスキルアップを行った。原則的にプログラム参加者は全員必修としたが、時間割上必修科目との重複があったため受講できない学生もいた。

2.6 オンライン英会話

2.4でも簡潔に述べたように、科目Aでは留学に向けた諸準備を進めるだけでなく、その一環としてオンライン英会話を毎日25分授業外課題（留学前後それぞれ約3ヶ月間）として課している。これは外部委託し有料レッスンであるが、今年度は本学から奨学金を支給しており、学生側の負担はなかった。ただ、前期・後期それぞれの受講率が70%を超えなかった場合には奨学金の返還を求めるという措置を取ることになっており、学生には奨学金返済に関する承諾書を提出してもらった。

2.7 現地研修

8月11日から9月7日の約1ヶ月間フィリピンセブ島にある4つの語学学校に分かれて学習した。これら4校はそれぞれ独自のカリキュラムを持っているが、プレースメントテストの結果をもとにレベル分け・クラス分けを行う点、マンツーマンレッスンを中心とした授業を展開している点は共通している。

以下4校を13項目から比較する。表3は筆者本人の視察や各学校から提供された資料、各学校のホームページ等をもとに作成しているが、事実とは若干異なる部分があるかもしれない。例えば項目中の「インターネット」で用いている「つながりづらい」「つながりは良好」等の表現は、日本のネット環境と比較するものではない。通信速度は速いとは言えないが無理なく使える場合には「良好」とし、時間帯や場所によって全く接続できない場合は「つながりづらい」とした。

また「マンツーマンレッスン」と「グループレッスン」に関する項目は、あくまで本学が利用したプランにおける時間数で、実際参加者が受講した時間数を示している。

表 3　語学学校 4 校の比較

項目	A校	B校	C校	D校
マンツーマンレッスン	50 分×5 コマ / 日	50 分×4 コマ / 日	100 分×2 コマ / 日	50 分×4 コマ / 日
グループレッスン	50 分×2 コマ / 日	50 分×2 コマ / 日	100 分×2 コマ / 日	50 分×2 コマ / 日
寮の立地	学校と併設	学校と併設	学校と併設	学校とは別の場所に立地
セキュリティー	塀で囲まれている ゲートに警備員	入口に警備員	塀で囲まれている ゲートに警備員	学校のある建物・寮ともに入口に警備員
周辺環境	近くに店がない	近くにコンビニがある	近くにショッピングモールがある	寮の近くにショッピングモールがある 学校が商業施設内にある
食事	校内の食堂 基本的に韓国食	校内の食堂 基本的に韓国食	校内の食堂 基本的に韓国食	同建物内の食堂または寮内の食堂 基本的に日本食
掃除・洗濯サービス	あり	あり	あり	あり
自習室・学習スペース	自習室あり	学習スペースあり	学習スペースあり	学校・寮ともに自習室あり
寮の部屋	各部屋にトイレ・シャワー 2 人部屋または 3 人部屋を利用 数名は韓国人がルームメイト	各部屋にトイレ・シャワー 2 人部屋または 3 人部屋を利用 数名は韓国人がルームメイト	各部屋にトイレ・シャワー 2 人部屋または 3 人部屋を利用 全員が本学の学生同士の部屋	各部屋にトイレ・シャワー 2 人部屋または 3 人部屋を利用 全員が本学の学生同士の部屋
その他の施設	スポーツジム、プール	マッサージ室、医務室	特になし	特になし
スタッフ	日本人スタッフが常駐	日本人スタッフが常駐	日本人スタッフが常駐	日本人スタッフが常駐
学生	学生定員数：230 名 約 85%以上が韓国人	学生定員数：400 名 約 85%以上が韓国人	学生定員数：90 名 約 85%以上が韓国人	学生定員数：180 名 100%が日本人
インターネット	Wi-Fi があるが、つながりづらい	オープン Wi-Fi があり、つながりも良好	オープン Wi-Fi があるがつながりづらく、場所も限定されている	オープン Wi-Fi があり、つながりも良好

2.8 留学事後講座（科目Ｂ）

留学後の後期開講科目は、セブ島留学プログラムの振り返り（留学後レポートやプレゼンテーションの作成等）や、さらなる英語力（主にスピーキングとリスニング）のスキルアップを目的としている。科目Ａと同様プログラム参加者は全員必修としたが、時間割上必修科目との重複があったため受講できない学生もいた。

3. 留学の成果

本章では、この留学プログラムを通して参加者がどれだけ英語力を伸ばしたのかという成果を測るために、TOEIC IP のスコアと留学後アンケートを観察してみる。

なお、調査対象の母集団が小さいので標準偏差などの算出は控える。

3.1 TOEIC のスコア

本節では、5 月 18 日（留学前）と 10 月 5 日（留学後）に学内で実施した TOEIC IP のスコアを比較し、参加者の英語力がどのように推移したのかを観察する。参加者 50 名のうち両日ともに受験した 36 名のスコアを対象に、表 3 を参照しながら分析する。なお、上記の TOEIC IP を受験できなかった参加者には、可能な限り早期に実施される学内 TOEIC IP または公開 TOEIC を受験してもらっており、回収されているスコアもあるが、本論の分析からは除外した。

まず 36 人全員の Total スコアの平均から見てみると、留学前より留学後の方が 990 点満点で 75.1 点高くなっている。英語英文 1 年 25 名と他学科 1 年生 9 名のスコアの伸びを比較してみると、それぞれ 82.2 点と 44.4 点で、英語英文 1 年のスコアの伸び幅の方が 40 点近く大きい。

表 4　セクション別 TOEIC スコアの比較

Section		受験者全員(N＝36)	英語英文 1 年(N＝25)	他学科 1 年(N＝9)
Total (990)	Total 1	310.1	313.2	272.8
	Total 2	385.3	395.4	317.2
	Total 2－Total 1	75.1	82.2	44.4
Listening (495)	Listening 1	187.6	191.4	159.4
	Listening 2	239.3	250.8	190.6
	Listening 2－Listening 1	51.7	59.4	31.1
Reading (495)	Reading 1	122.6	121.8	113.3
	Reading 2	146.0	144.6	126.7
	Reading 2－Reading 1	23.5	22.8	13.3

※少数第 2 位を四捨五入
※Total 1、Listening 1、Reading 1 は 5 月 18 日受験、Total 2、Listening 2、Reading 2 は 10 月 5 日受験の平均スコア

次にリスニングとリーディングそれぞれのセクションにおける平均点の推移を観察する。受験者全体のスコアの伸びを見てみると、リスニングは 495 点満点で 51.7 点、リーディングは同じく 495 点満点で 23.5 点高くなっている。

英語英文 1 年と他学科 1 年のリスニングとリーディングそれぞれの平均点の差を比較してみる。英語英文 1 年のリスニングは 59.4 点、リーディングは 22.8 で、リスニング力においてより顕著な向上が見られた。一方他学科 1 年では、リスニングが 31.1 点、リーディングは 13.3 点と、リスニング力は明確なスコアの伸びがあったと言えるが、リーディング力は誤差の範囲内である可能性も否定できず、向上したとは一概に言えない。

このような英語英文 1 年と他学科 1 年のスコアの伸び幅の差には様々な要因が関係している可

能性があるが、大きな要因の一つは学習時間の相違である。他学科、すなわち英語専攻でない学生が1週間に受講する英語関連授業は留学準備講座（科目A）を含めて2科目しかない。一方で英語英文の1年生は毎日平均約2コマ（1コマ90分）の英語関連授業を受講している。それだけではなく、授業外の課題や今年度から始まった補習授業（30分程度週5回）など、本プログラム以外の英語学習も行っている。このような学習時間の相違が要因となっていることは否定できないだろう。

3.2 留学後アンケート

このアンケートは、後期開講の留学事後講座（科目B）の初回授業にて記入してもらった。この授業を受講できない学生には別途に対応し、参加者50名全員からアンケートを回収した。

質問項目のうち27項目が5件法による選択式で、いずれの項目にも自由記述欄を設け、なぜそう思うのか理由を書き込んでもらっている。それ以外は自由記述6項目、複数回答可能な選択式を1項目入れた。ただこれらの項目には、本稿の主旨とは直接関連していない項目も含まれているため、それらについては除外する。また本節では、参加者の自己評価、特に英語力に関わる項目のみに焦点を当てる。

以下参照する図表や記述に現れる「合計値」とは、「とてもあてはまる」を5、「全く当てはまらない」を1とする5段階の数値に回答数をかけ合わせ、それらを合算したものである。さらに、この「合計値」を各学校の回答者数で割って出した平均値を「英語力の自己向上感」とした。これはTOEICのスコアが上がるなど英語力が実際に向上しているかいないかに関わらず、母集団全体が自分の英語力がどの程度向上したと感じているかを示す度合いと定義する。以降これを「自己向上感」と省略して用いる。

なお、これらの数値は必要に応じて少数第2位を四捨五入して少数第1位まで示してある。ま

図1　英語力の向上（N＝50）

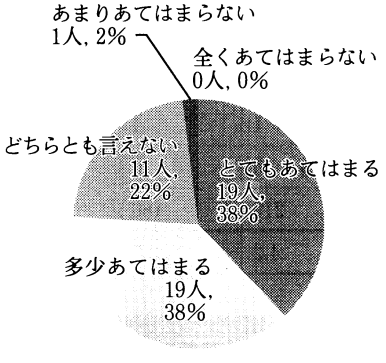

表5　学校別集計表－英語力の自己向上感

	A校	B校	C校	D校	全体
とてもあてはまる	3	7	4	5	19
多少あてはまる	2	5	6	6	19
どちらとも言えない	3	2	5	1	11
あまりあてはまらない	0	1	0	0	1
全くあてはまらない	0	0	0	0	0
無効値	0	0	0	0	0
合計値	32	63	59	52	206
自己向上感（平均値）	4.0	4.2	3.9	4.3	4.1

た5段階の真ん中に位置している3を基準として考察を進めていくために、便宜上これを「基準値」と呼ぶことにする。

まず「前より英語力が高まった」という質問に対しては（図1参照)、76%の参加者が「あてはまる」と回答している。「あてはまらない」と回答したのは1名のみであった。一方自己向上感を見てみると（表5参照)、全体の自己向上感が4.1と基準値を大きく上回っている。また学校間で比較すると、最高であったD校の4.3と最低であったC校の3.9の差が0.4と小さく、どの学校に所属した参加者も一定の自己向上感を得ていると推察される。

次に表6を参照しながら「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能についての自己向上感について見ていく。まず注目すべきは最も高い自己向上感を示したリスニングである。自由記述にも、「授業開始日より最終日の方が聞き取れた」「帰ってオンライン英会話をしたとき、前より聞き取れていると感じた」という技能面だけでなく、「抵抗はあまり感じなくなった」「言いたいことを理解しようとする姿勢になった」という情緒面での向上に関わる記述が散見された。

他の3技能の自己向上感では、スピーキングとリーディングがともに4.2でリスニングに続き、ライティングは3.7と基準値は上回ってはいるが、4技能中最も低かった。ライティング力の向上に関する自由記述を見てみると、通っていた学校に関わりなく「書く授業が少なかった」「書くことはあまりしなかった」という記述もあれば、「ライティングでエッセイを毎日書かされた」「グループレッスン時に英作文がスラスラと書けた」という記述もあった。これは、学校毎のカリキュラムの相違というより、講師が受講者に合った授業内容を判断し、教え方を変えていたことが関係しているのではないかと考えられる。いずれにしても書くことを授業内外でする機会が少なかったことがライティングの自己向上感の相対的な低さに影響していると推察できる。

表6　技能別英語力の自己向上感（N＝50）

	Listening	Speaking	Reading	Writing
とてもあてはまる	33	21	18	11
多少あてはまる	12	19	26	18
どちらとも言えない	4	10	5	18
あまりあてはまらない	1	0	0	2
全くあてはまらない	0	0	1	1
無効値	0	0	0	0
合計値	227	211	210	186
自己向上感（平均値）	4.5	4.2	4.2	3.7

最後に、「前より英語が好きになった」「英語をもっと学びたくなった」「英語に自信がついた」という項目の回答について見ていく。

まず特筆すべきは「前より英語が好きになった」「英語をもっと学びたくなった」に対して90%を超える参加者が「あてはまる」と回答していたこと（図2・図3参照)、また前者に対しては「あてはまらない」と回答した参加者がゼロであったことである。留学の結果、英語学習に対しての意欲や動機づけが高くなったことは今後の英語学習に期待が持てるのではないだろうか。

ただ一方で「英語に自信がついた」に対しては、58%に留まっており必ずしも高くはなかった(図4参照)。この結果に対する解釈は様々であるが、帰国してTOEICのスコアが全体として75点以上上がっているとは言え、いまだに平均がTOEIC400点未満であり、自信を持てないのも無理はないとも判断できる。

この質問項目の自由記述を「楽観的・自己肯定的」と「悲観的・自己否定的」に分類し、表7のように集計した。複数の内容を記述しているものについては、その文脈からより強調されている項目に、どちらとも判断できないものは「その他」に分類した。

その結果、14件あった未記入分を除いた36人のうち21人は楽観的または自己肯定的な記述

図2　英語をもっと学びたくなった（N＝50）

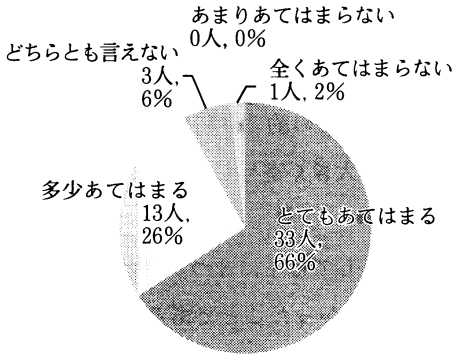

図3　前より英語が好きになった（N＝50）

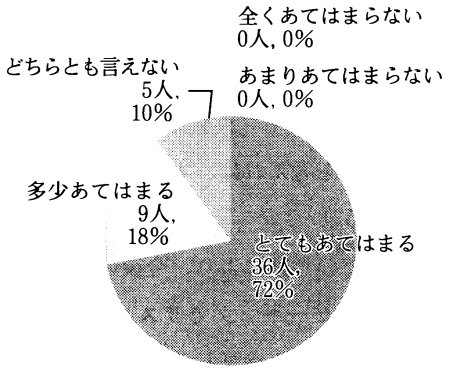

図4　英語に自信がついた（N＝50）

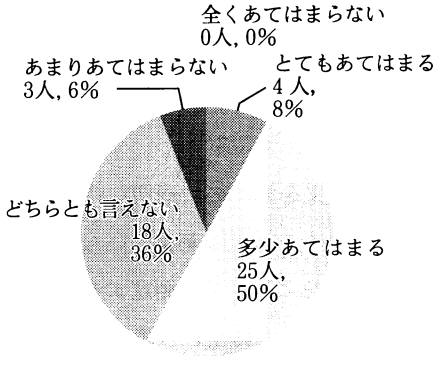

表7　「英語に自信がついた」関する自由記述集計表

楽観的・自己肯定的	自信あり	7
	多少・前より自信あり	9
	その他の楽観的・自己肯定的回答	5
	小計	21
悲観的・自己否定的	自信なし	3
	まだまだ	6
	その他の悲観的・自己否定的回答	2
	小計	11
その他		4
未記入		14
合計		50

をしていた。中でも「前より自信がついた」「少し自信がついた」との回答が9件と最も多かった。また「その他の楽観的・自己肯定的回答」には、「自信はないけど、恥はなくなった」「ミスをしてもいいと思えるようになった」「以前より英語を話すことに抵抗を感じなくなった」など、直接的に自信を得たとは書いていないが、今後の好材料となるような精神的な進歩を感じているものも散見された。一方「悲観的・自己否定的」回答では、「まだまだ」という回答が6件あったが、自信の欠如に起因する記述なのか、自分の現状に対して謙虚な態度をとっているのかは判断できない。しかし、このような記述は意欲とも判断でき、今後の学習に期待が持てる結果とも言えるかもしれない。

3.3 まとめと今後の課題

これまで述べてきたように、TOEICのスコアや事後アンケートの結果から、本プログラムを通して参加者の英語力が向上したこと、またそれに伴い彼らの英語や英語力に対する意識にも肯定的な変化があったことが分かった。特にTOEICのリスニングのスコアに大幅な改善が見られたことは注目すべきである。また事後アンケートでリスニング力が最も向上したと感じており、これらの結果から2.2で示した本プログラムの目的を一部果たしたと言えるのではないだろうか。もちろん、TOEICのスコアの伸びに関しては本プログラムのみの成果とは言えないが、留学までのオンライン英会話の受講率の平均が70%を超え、現地での約120時間のレッスンを受講したことを考えれば、本プログラムが参加者の英語力向上に大きく寄与したことは言うまでもないだろう。

前節までの考察により、今後の課題も明確になった。課題としては主に3つが挙げられる。1つ目は、スピーキングでリスニング程の自己向上感が得られなかったことである。何に原因があったのか詳しく検証し改善方法を検討しなければならない。2つ目は、スピーキング力やリスニング力を身に付けることを目標としていたにも関わらず、スピーキング力を測るテストがプログラムに組み込まれていなかったことである。実際、外注したオンライン英会話のオプションでスピーキングを測定するテストはあったのだが、このテストの信頼性や妥当性が確認できておらず、本論では扱っていない。今後独自のテストを開発することも視野に入れつつ検討していく必要があると考える。

最後に、参加者にTOEICを受験させた時期がプログラムの成果を測るのに適切な時期であったのかという問題である。今年度、他の学校行事や他の留学プログラムとの兼ね合いもあり、受験時期に限りがあり調整が困難であった。このプログラムの効果をより正確に測定するのであれば、Pre-testとPost-testをそれぞれオンライン英会話の開始日以前と終了日以降、または現地留学の直前と直後に実施すべきで、検討の余地がある。

4. プログラムの評価

本章では、留学後アンケートの質問項目のうち、プログラムの評価に関わるものについて分析する。特にプログラムの総合的な評価に関わる項目や語学学校や寮に関わる項目の回答に関して概観し、プログラムの今後の課題を明らかにする。

4.1 総合的な満足度に関する項目

図5から「とてもあてはまる」と「多少あてはまる」を合わせると82%の参加者が本プログラムに満足している。また「全くあてはまらない」と「あまりあてはまらない」を合わせても1名のみが不満足であったことも特筆すべきで、参加者全体として満足度が高かったことを示唆している。

図5 本プログラムの総合的満足（N＝50）

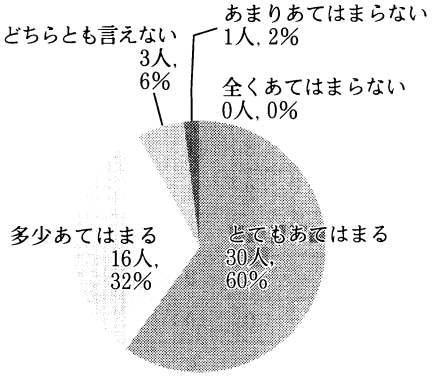

表8 総合的満足度に関する自由記述集計表

肯定的	楽しかった・充実	14
	良い経験・体験	13
	授業・語学・勉学	6
	その他の肯定的回答	3
	小計	36
非肯定的	授業・勉学	2
	治安	2
	その他の非肯定的回答	1
	小計	5
その他		4
未記入		5
合計		50

もう少し詳しく観察するために、この質問項目の自由記述欄に記述されていた回答に対する理由を表8のように「肯定的」と「非肯定的」に分類した。複数の内容を記述しているものについては、その文脈からより強調されている項目に、「肯定的」「非肯定的」どちらとも判断できないものは「その他」に分類した。

結果として肯定的な記述は36件で、非肯定的の5件を大きく上回り、図5に見られるような総合的な満足度の割合と傾向的には類似している。ただし、「非肯定的」な記述は5件あり、図5の結果とは多少食い違っている。

4.2 語学学校の満足度に関する項目

語学学校や寮に関する質問項目の回答について見ながら、前項より少し詳しく考察する。なお、各項目別にグラフで参加者全体（いずれの項目も参加者50人全員が回答）の回答の割合を示すと同時に、学校毎のばらつきを観察するためのクロス集計表を作成した。この表中の「合計値」とは「とてもあてはまる」を5、「全く当てはまらない」を1とする5段階の数値に回答数をかけ合わせて算出したものである。さらに、この「合計値」を各学校の回答者数（在籍者数）で割って出した平均値を「満足度」とした。以降「満足度」は母集団全体の満足の度合いを示す数値として扱う。

これらの数値はどれも必要に応じて少数第2位を四捨五入して少数第1位まで提示してある。また5段階の真ん中に位置している3を基準として考察を進めていくために、便宜上これを「基準値」と呼ぶことにする。

まず86%の参加者が語学学校に対して満足しており（図6参照）、満足度3.5からも評価が高いことが分かる（表9参照）。「全くあてはまらない」と「あまりあてはまらない」を合わせても1名のみが不満足であったことも、語学学校に対する評価が高かったことを示している。

図6　語学学校に対する満足（N＝50）

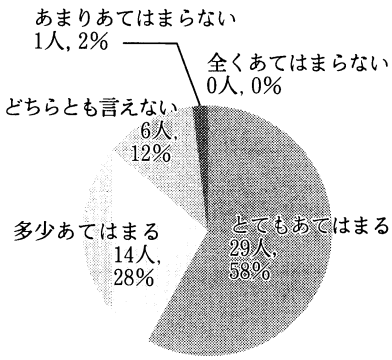

表9　学校別集計表－語学学校に対する満足度

	A校	B校	C校	D校	全体
とてもあてはまる	3	11	9	6	29
多少あてはまる	2	4	4	4	14
どちらとも言えない	2	0	2	2	6
あまりあてはまらない	1	0	0	0	1
全くあてはまらない	0	0	0	0	0
無効値	0	0	0	0	0
合計値	31	71	67	52	221
満足度（平均値）	3.9	4.7	4.5	4.3	4.4

学校毎の満足度を見るといずれの学校も基準値を超えているが、A校が3.9と4校中最も低く全体の満足度からも0.5下回っており、相対的に見て満足度が高いとは言えなかった。自由記述に書かれている理由を見てみると、「慣れるまでにとても時間がかかるから」「もう少し衛生面を改善してほしい」「もっと改善できる点があったのではないか」などが記述されていた。またB校が4.7と最も高い満足度であったが、自由記述欄には「環境が整っていた」「食事もまあまあ良く、部屋も良かった」と環境面についての記述や、「先生達が良かった」「先生がやさしく授業も丁寧だった」など講師に対する評価の高さが満足度に関係していることが推察できる記述が散見された。

図7　語学学校の授業に対する満足(N=50)

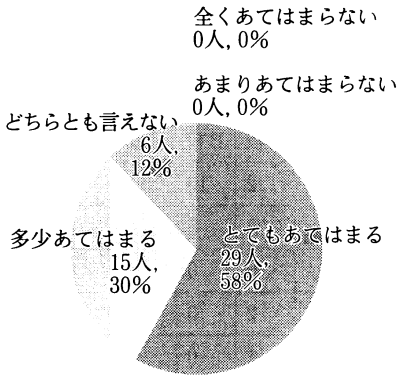

表10　学校別集計－語学学校の授業に対する満足度

	A校	B校	C校	D校	全体
とてもあてはまる	5	9	10	5	29
多少あてはまる	0	6	4	5	15
どちらとも言えない	3	0	1	2	6
あまりあてはまらない	0	0	0	0	0
全くあてはまらない	0	0	0	0	0
無効値	0	0	0	0	0
合計値	34	69	69	51	223
満足度（平均値）	4.3	4.6	4.6	4.2	4.5

図8　語学学校の講師に対する満足(N=50)

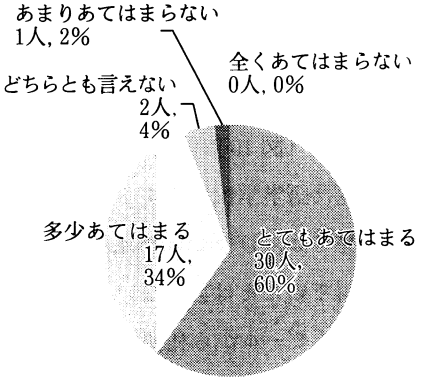

表11　学校別集計表－語学学校の講師に対する満足度

	A校	B校	C校	D校	全体
とてもあてはまる	5	12	10	3	30
多少あてはまる	2	3	4	8	17
どちらとも言えない	1	0	0	1	2
あまりあてはまらない	0	0	1	0	1
全くあてはまらない	0	0	0	0	0
無効値	0	0	0	0	0
合計値	36	72	68	50	226
満足度（平均値）	4.5	4.8	4.5	4.2	4.5

次に語学学校の授業と語学学校の講師に対してどの程度満足しているのか観察する。語学学校の授業に対しては88%（図7参照)、語学学校の講師に対しては94%の参加者が満足しており(図8参照)、全体の満足度はいずれも4.5であった（表10・表11参照)。プログラムの中心的な役割を担う語学学校の授業への評価は高く、注目すべき点である。

学校別の満足度を見ても、授業と講師双方の満足度が全ての学校において基準値を超えており、B校の語学学校の講師に対する満足度が4.8と最も高い値であることを筆頭に、どの学校の授業も講師も一定の評価を受けていることが分かる。

語学学校全体に対する満足度の分析でも述べたが、このような語学学校の授業や講師に対する評価の高さが語学学校全体の満足度を高めていることが推察される。

次に語学学校のスタッフに対する満足の度合いを見ていく。全体としては92%が満足しており（図9参照)、全体の満足度でも4.5と非常に高かった（表12参照)。学校別に見てみると、C校の満足度が4.9と圧倒的に高い一方で、A校は3.4と最も低く、3位のD校と比較しても1.1

も低いことから評価が高いとは言えなかった。回答数を見ても、全回答の中でA校の3名のみが満足していないことは注目する必要があるかもしれない。

図9 語学学校のスタッフに対する満足(N=50)

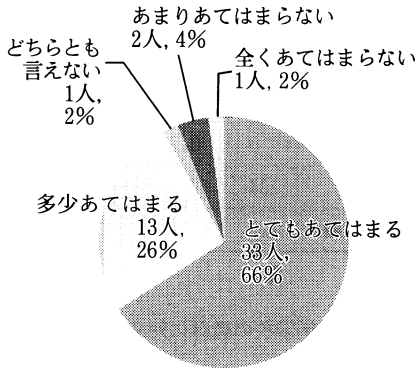

表12 学校別集計表－語学学校のスタッフに対する満足度

	A校	B校	C校	D校	全体
とてもあてはまる	2	10	14	7	33
多少あてはまる	3	5	1	4	13
どちらとも言えない	0	0	0	1	1
あまりあてはまらない	2	0	0	0	2
全くあてはまらない	1	0	0	0	1
無効値	0	0	0	0	0
合計値	27	70	74	54	225
満足度（平均値）	3.4	4.7	4.9	4.5	4.5

4.3 寮の満足度に関する項目

寮に対する全体的な評価としては、72%の参加者が満足しており（図10参照)、全体の満足度でも3.8と基準値を上回っている（表13参照)。ただ、前節で見た語学学校に関する各満足度と比較すると高い評価を得ているとは言い難い。学校別の満足度では、D校の寮が4.3と最も高かったが、他の3校については相対的に見てあまり高い評価を得ていたとは言えない。最も満足度の高かったD校の自由記述を見てみると「居心地が良かった」「モールから利便性もあり、安全だった」など肯定的な理由が散見された。

図10 寮に対する満足（N=50)

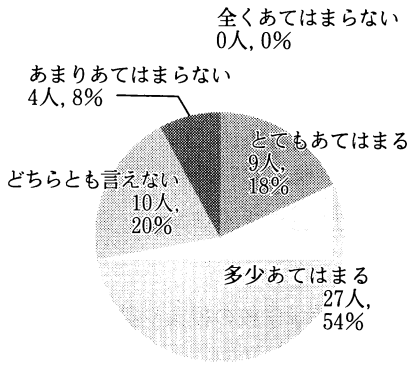

表13 学校別集計表－寮に対する満足度

	A校	B校	C校	D校	全体
とてもあてはまる	0	2	2	5	9
多少あてはまる	5	8	8	6	27
どちらとも言えない	1	4	4	1	10
あまりあてはまらない	2	1	1	0	4
全くあてはまらない	0	0	0	0	0
無効値	0	0	0	0	0
合計値	27	56	56	52	191
満足度（平均値）	3.4	3.7	3.7	4.3	3.8

寮の食事に対しては、全体の56%が満足であったと回答し（図11参照)、全体の満足度は3.3と基準値を上回ってはいるが高いとは言えない(表14参照)。学校別では、C校とD校が唯一基

準値を上回ってはいるが、他の2校が基準値を下回っており、満足度の低さを示している。また、なぜD校の評価が高いのかを知るために自由記述を見てみると、「美味しかった」という記述だけでなく、「日本食だった」という記述が目立った。

図11　寮の食事に対する満足（N＝50）

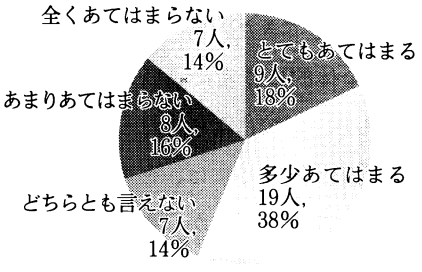

表14　学校別集計表－寮の食事に対する満足度

	A校	B校	C校	D校	全体
とてもあてはまる	0	0	4	5	9
多少あてはまる	2	5	6	6	19
どちらとも言えない	3	2	1	1	7
あまりあてはまらない	1	4	3	0	8
全くあてはまらない	2	4	1	0	7
無効値	0	0	0	0	0
合計値	21	38	54	52	165
満足度（平均値）	2.6	2.5	3.6	4.3	3.3

最後に寮の食事以外の生活に関して観察する。まず全体を見てみると、76％が満足していると回答し（図12参照）、全体の満足度では4.0と基準値を1.0上回っている（表15参照）。個別の学校では多少のばらつきはあるが、最も高かったB校と最も低かったA校の差が0.5未満であることから考えても、4校全て一定の評価を受け、その評価は学校間であまり差がないことが分かる。

図12 寮の食事以外の生活に対する満足(N＝50)

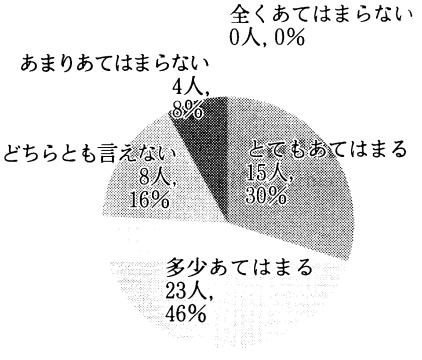

表15　学校別集計表－寮の食事以外の生活に対する満足度

	A校	B校	C校	D校	全体
とてもあてはまる	2	8	5	0	15
多少あてはまる	4	2	6	11	23
どちらとも言えない	0	5	3	0	8
あまりあてはまらない	2	0	1	1	4
全くあてはまらない	0	0	0	0	0
無効値	0	0	0	0	0
合計値	30	63	60	46	199
満足度（平均値）	3.8	4.2	4.0	3.8	4.0

4.2と4.3でそれぞれ語学学校と寮に関する質問項目の回答から算出した満足度を見てきた。これらの観察から、語学学校に関してはいずれの項目も80%、場合によっては90%を超える参加者が満足していた。一方寮に関する評価は、全体的に語学学校に対する評価より低く、3項目

全てが80%を切っていた。中でも食事に関する項目は全体で最も評価が低く、また学校別に見た満足度の最高値と最低値の差が1.8と、全ての最高値と最低値の差の中で最も大きく開いていたことは、学校間で評価に隔たりがあることを示しているだろう。

4.4 まとめと今後の課題

前節までで、満足度を中心に本プログラムに対する評価を概観してきた。結果として、プログラム全体の評価は高く、特に現地の語学学校に対する評価が全体的に非常に高いことが分かった。ただ学校毎の満足度を比較した場合、多少のばらつきがあり、学校によっては一定の評価を得られていない項目も見られた。今後より良いプログラムを構築するためには、どのような語学学校を選択していくべきなのかの議論が必要である。もちろん、アンケートから得られた満足度から短絡的に学校に優劣を付けるのではなく、様々な視点から総合的に検討することが不可欠であると考える。

おわりに

本稿では、今年（平成25年）度実施した「セブ島留学プログラム」の大まかな流れを紹介し、留学の成果とプログラムの評価を考察した。本来、留学の成果とプログラムの評価は別々の論文にまとめ、より詳細に分析を進めるべきであったかもしれない。しかし、広く学内外の方々に本プログラムが今年度どのように実施されたのか、何が課題として残ったのかを報告することに焦点を当てるために、このような形を取った。

参考文献

倉増泰弘・松谷緑（2008）.「英語教育・国際理解教育に携わる教員のための研修プログラムの構築に向けて」『教育実践総合センター研究紀要』第25巻, pp.329-335.

文部科学省（2013）.『日本人の海外留学状況』2013年10月25日検索.
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/02/__icsFiles/afieldfile/2013/02/08/1330698_01.pdf